

# 長い旅をしてきた 古いオルガンのものがたり

このオルガンは、100年以上前に作られたものです。作られたのはアメリカのオースティン社。そこから上海に渡り、教会のオルガンとして賛美歌を奏でていました。

そこでこのオルガンを譲り受けたのは、安川トヨさんという女性でした。

トヨさんのご紹介をします。彼女は1883年(明治16年)福島県生まれ。福島師範学校を出て福島県原町市(現・南相馬市)で小学校の先生をしたのち、28歳で日本女子大学校に入学。その後は兄の子ども達5人を旧制中学・女学校以上まで出すべく、当時お給料が高かった上海の居留民団日本人学校に勤めました。

そんなトヨさんが、下宿先だった教会でこのオルガンと出会い、譲り受けることになります。大正時代のことです。その後、1923年(大正12年)にはトヨさんは日本に戻っていたようで、オルガンが日本に来たのもその頃だと思われます。

上海から船で九州のどこかの港に着き、陸路で長い旅をして着いたのが、トヨさんの故郷・福島県原町市(現・南相馬市原町)。戦争を乗り越え、トヨさんが70歳を過ぎて「青葉幼稚園」を開いてからは、そこで子ども達にバロックの音色を届けていました。戦中戦後の苦難を乗り越え、自分で道を切り開いて子ども達の成長に関わってきたトヨさん。そして、その娘・キエさんも母と同じ教育の世界へと入り、幼稚園を発展させていきます。その貢献が認められ、二代にわたって天皇陛下より表彰を受けています(勳六等寶冠章・安川トヨさん1966年[昭和41年]11月3日授章、安川キエさん1997年[平成9年]11月3日授章)。

トヨさんが100歳の大往生でこの世を去り、幼稚園には彼女の教育者一筋の人生を見守ってきたオルガンが残りました。

幼稚園にピアノが寄贈されてからはオルガンは弾かれることも少なくなり、子ども達のおもちゃになってしまっていたそう。すっかり痛んでいましたが、北海道にいる

トヨさんのお孫さんへと引き継がれることになり、仙台の修理屋さんに頼んで、想い出のオルガンを甦らせました。

何しろ100年以上昔のもの。なくなってしまっている部品もありました。でも、全部解体して掃除もし、足りない部品は足し、また素敵な音色が出るようになりました。

昭和から平成へ、北海道で30年以上の時を穏やかに過ごしたこのオルガンですが、お孫さんはその姿を見て、こう思うようになってきたそうです。

「遠い地から旅をして、いろんな歴史を刻みながら今ここに現存するオルガン。自分の代で終わりにするのではなく、もっと多くの人の目に触れてもらい、この音色で癒されてほしい…」。

大切にしてくれる人のもとでまた時間を重ねて、後世につないで欲しい、そんな願いに応えたのが、遠く、熊本の地にいた当クリニックの院長でした。

「何物にも代え難いオルガンの価値に、強く強く引きつけられた」と院長。

どんな時代、どんな環境にあっても人々と共にあり、力強く歴史を刻んできたオルガンの尊さに感銘を受け、今を生きる自分が大切に受け継いで守っていきたいと思ったのです。

そして、クリニック3周年に合わせて、長い旅の末に私たちの元へと来てくれたアンティークオルガン。本当に古いアンティークのオルガンですが、とても深い良い音がります。バロック音楽はもちろん、日本の唱歌なども味わい深く奏でてくれます。100年以上の長い長い旅を感じさせる懐かしい音色と、戦争や地震を耐え抜いてきたその姿は、何にも代え難い、かけがえのない財産です。

他にはないオルガンだからこそ、来院してくださる患者様へ醸し出す癒しと優しさをお届けしたい。患者様にもっと癒される空間を提供し、そこで過ごす時間をゆったりと過ごしていただきたいとの思いを込めて、この待合室に展示致します。